

[研究ノート]

18世紀末テキサス—ルイジアナ^{ボーダーランズ}境界地域の形成過程

——フィリップ・ノーランの家畜交易を中心に——

二瓶 マリ子

はじめに

現在は米国領となっているテキサス州北東部は、18世紀にはヌエバ・エスパーニャ副王領の最北部を成した。これに加えて、もともとフランス領であったルイジアナ地方は、1763年(パリ条約)から1803年(ルイジアナ買収)までの間、スペイン領であった。つまり18世紀後半、スペイン領テキサス地方およびルイジアナ地方は、米国領と接する^{ボーダーランズ}境界地域であった。

18世紀末は、米国領土の境界線が西へ西へと徐々に伸張した時期であり、テキサス—ルイジアナ境界地域に流入する米国人の数は増加の一途をたどった。当時、広大な面積を有した当該地域は、スペイン人入植地がまだらにしか存在せず、たくさんの「野蛮な先住民」が生活していた。スペイン政府にとってこの地域は、天然資源に恵まれた副王領内陸部を諸外国の侵略から防衛するための緩衝地帯だったのである。本稿では、この緩衝地帯における米国人の活動が顕著になり始めた初期の状況に焦点をあてて、テキサス—ルイジアナ境界地域の形成過程を検討する。考察の対象とする具体的な事例は、アイルランド生まれの米国人フィリップ・ノーラン(Philip Nolan)の越境的な家畜交易である。テキサス—ルイジアナ間では、それぞれの地域にスペイン人とフランス人が入植し始めた18世紀初頭から、馬を中心とした家畜交易が行われていたが、18世紀末になると米国領からルイジアナに流入する米国人が増加し、彼らもこの慣習に倣い、家畜交易に従事するようになった。スペイン領と米国領を自由に横断し、家畜交易を担った最初の米国人が、ノーランだったのである。ノーランと、彼の交易活動を取り巻いた人びととの関係性に焦点を当てて、境界線が曖昧であった頃の当該地域の社会的・経済的状況の一端を明らかにするのが、本稿の狙いである。

ノーランの家畜交易が進展するにつれ、当該地域のスペイン人役人たちは次第に、スペイン領に米国が侵略することへの警戒心を強めた。そして、スペイン人役人が憂慮した事態は、1803年のルイジアナ併合を筆頭として、19世紀に突入すると徐々に現実化した。そのためノーランの事例は、19世紀半ばに発生したメキシコ—米国領土紛争および米墨戦争の背景として位置づけることができる。先行研究では、この歴史的背景が取り上げられ

ることは少ない。本稿ではノーランの事例に焦点を当てることで、メキシコと米国の対立が表面化する以前に、テキサスとルイジアナが強い相互関係で結ばれていた点を確認したい。そして、西漸運動や西部開拓といった米国側の動きばかりではなく、スペイン側の動きも射程にのいることで、1845年以降激化したメキシコ-米国間の領土紛争の一因を論じたい。

本稿は、近年、米国西部史の分野で進展している新たな境界地域史学の研究動向を踏まえたものである。境界地域とは、^{ボーダーランズ}米国南西部史の先駆者であるハーバート・ユージーン・ボルトン(Herbert Eugene Bolton)が『^{ボーダーランズ}スパニッシュ・ボーダーランズ：旧フロリダおよび米国南西部年代記』(1921年)において提唱した用語である⁽¹⁾。ボルトンの研究の特長は、スペイン人入植者たちがフロンティア社会に与えた影響を検討した点にあった。一方、彼の研究は、フロンティアの自然環境や民族・社会状況が新参者であるスペイン人入植者に与えた諸々の影響を、十分配慮しないという課題を残した⁽²⁾。このボルトンが等閑視した点は、1960年代以降、次第に着目されていった。「新たな社会史」が注目される中で、ラテン・アメリカ史に精通する歴史家や、メキシコ系米国人、先住民などのエスニック・マイノリティ集団に属する歴史家たちが、境界地域における多様な民族の歴史を掘り起こし始めたのである。これに加えて、1990年代以降になると、国民国家の枠組みを超え、一国史観に捉われない歴史学への関心が高まった。さらに、メキシコから米国への移民の増加も影響し、境界地域の歴史に対する関心が高まった。こうした一連の動向を踏まえた結果、今日多くの歴史学者は、支配者層に焦点を当てた旧来のトップ・ダウンかつ静的な歴史ではなく、境界地域の多様な民族(特に先住民)の交流、妥協、交渉、対立の過程に焦点を当てた、ボトム・アップかつ動的な歴史を描き始めている。これらの歴史家たちは、境界地域を「様々な人びとや多様な民族集団が衝突し、共存し、交流する中で、彼ら自身を再定義する邂逅の空間」と捉え直し、研究を進めている⁽³⁾。また、従来のように境界線で隔てられた片側の地域だけを検討するのではなく、両方の地域をひとまとまりとみなして検討する点も、今日的な研究動向の特徴と言える⁽⁴⁾。

(1) Herbert Eugene Bolton, *The Spanish Borderlands: A Chronicle of Old Florida and the Southwest* (New Haven: Yale University Press, 1921). ボルトンがいうところの境界地域とは、当初、テキサス州、ニューメキシコ州、アリゾナ州、カリフォルニア州など、19世紀前半までスペイン領であった今日の米国南西部および極西部のみを指す用語であり、それ以外の地域を指すものではなかった。近年の研究では、カナダ-米国国境地帯を始め、米国南西部以外の世界各地の国境地帯に関する研究でも、境界地域という用語が使用され始めている。Michiel Baud and Willem van Schendel, "A Comparative Approach to Borderlands," in Pekka Hämäläinen and Benjamin H. Johnson, eds., *Major Problems in the History of North American Borderlands* (Boston: Wadsworth, 2012), pp. 3-13.

(2) Herbert E. Bolton, "The Epic of Greater America," *The American Historical Review* 38, no. 3 (1933), pp. 448-474; David J. Weber, "Turner, the Boltonians, and the Borderlands," *The American Historical Review* 9, no. 1 (1986), p. 68. このような欠点があったとはいえ、ボルトンが、当時の先住民研究の促進に大きな影響を与えた点は、強調しておきたい。

(3) Hämäläinen and Johnson, "Preface," in *Major Problems in the History of North American Borderlands* (前注1参照), p. xvi.

(4) Baud and van Schendel, "A Comparative Approach to Borderlands" (前注1参照), p. 6.

この新たな研究動向を踏まえたうえで、本稿は、境界線の両側の地域に焦点を当てながら、テキサスルイジアナ境界地域の民族間関係を検討する。当該地域を扱った既存の研究は、①米国とスペイン／メキシコとの国家間対立、②アングロ系米国人の入植・開拓のプロセス、といった二つのテーマに焦点を当てる傾向がある。しかしこれらの先行研究は、歴史の一側面を描いているに過ぎない⁽⁵⁾。

まず①のテーマに関して言えば、当該地域が境界地域であったため、境界線をめぐる国家間の対立が絶えなかったことは否めない。しかし、本稿第1章以降で詳述するように、たとえ当該地域を支配した者たちが政治的な意図から境界線を引き、互いに対立したとしても、そこに住む現地の人びとは、彼らを隔てる地図上の境界線など気にもとめずに交流して生活していたのである。交易活動は、これを示す良い事例と言える。スペイン王室は当時、副王領がスペイン本国以外の地域と交易することを禁じていた。そのため、テキサスルイジアナ間の交易は、王室からの許可が無い限り、違法であった。しかし辺境地テキサスには、副王領内陸部から物品が届かなかつたか、届いたとしても高価であった。そのため、テハーノ (Tejanos) と呼ばれた貧しいテキサスの住民は、隣接するルイジアナのフランス人商人から安価な日用必需品を入手するしかなかった。テキサス総督自身も、副王領には報告せずに、副王領内陸部から入手することが困難な銃や火薬をルイジアナから仕入れていた。それゆえ、ルイジアナとの交易に従事するテハーノや、テキサスで行商するフランス人商人が罰せられることは少なかった。テキサス総督府が外国籍の交易従事者を本格的に取り締まり始めたのは、フランス革命の影響が新大陸にも及び始め、また、イギリスからの独立を果たした米国がスペイン領に侵略する可能性が高まった1795年以降のことである。この時期まさにテキサス－米国間で交易を行っていたノーランは、スペイン－米国間関係の悪化に翻弄され、最終的には命を落とした。

②のテーマについて言えば、当該地域はもともとスペイン領(およびフランス領)であった。そのため、そのヨーロッパ人入植の時代の歴史を無視したまま、1820年代以降本格的にテキサスに流入した米国人開拓者に焦点をあてる既存の研究には限界がある。ヨーロッパ人が入植を開始した18世紀初期から、当該地域は先住民、スペイン人、フランス人といった多様な民族が交流し、妥協と協調を繰り返しながら共存する境界地域であった。彼らは長年かけて交易ネットワークを築きあげた。そして18世紀末以降当該地域に流入し始めた新参者の米国人は、この既存の社会秩序を活用しつつ、テキサスで活動した。しかし、米国西部開拓史においてはこの点はあまり論じられず、勇敢な米国人が他人には頼らず、

(5) Gregg Cantrel, *Stephen F. Austin: Empresario of Texas* (New Haven: Yale University Press, 2001); Alan C. Huffines, *The Texas War of Independence, 1835-1836: From Outbreak to the Alamo to San Jacinto* (Oxford: Osprey Publishing, 2005); H. W. Brands, *Lone Star Nation: The Epic Story of the Battle for Texas Independence* (New York: Anchor Books, 2004); Walter Prescott Webb, *The Texas Rangers: A Century of Frontier Defense*, 2nd ed. (Austin: University of Texas Press, 2008).

己の努力によって荒野を開拓した姿が強調される。ノーランも、このような西部開拓者の一人として論じられる傾向がみられる。なぜなら彼は、それまで米国にとって未知の世界であったテキサスに他の米国人よりも早い時期に赴き、家畜交易を始めた人物であったからである⁽⁶⁾。しかし、ノーランは、当該地域に住む先住民やスペイン人、フランス人など多くの人びとからの協力を得る中で、交易活動を実現した。あくまでも彼は、家畜交易を支えた人びとのうちの一人だったのであり、彼個人の努力のみで交易が成立したのではない。そのため本稿では、ノーランと、彼の活動に協力的・非協力的であった人びととの関係性の中で交易が成り立っていた点を検討したい。そして、大きく二つに分けられる先行研究では描かれてこなかった歴史の諸側面を描出することにより、動的な境界地域史を提示したい。

本稿は、二つの章から構成される。第1章では、テキサスルイジアナ境界地域の18世紀の歴史を概観する。そして、当該地域は、そこにヨーロッパ人入植地が形成された当初から、境界線で隔てるのが難しい相互依存の関係にあったことを示す。第2章は、本稿の中心を成すものであり、スペイン領-米国領間を移動し、越境的な家畜交易をおこなったノーランの交易活動を、彼を取り巻いた人びととの関わりに着目しながら、検討する。

一次史料は主に、テキサス大学オースティン校(University of Texas at Austin)が所蔵するベハル・アーカイブ(Bexar Archives)を参照する⁽⁷⁾。これは、テキサスへのスペイン人入植が始まった1717年から、テキサスがメキシコから独立した1836年までの、当該地域の軍事・政治・経済・民族・社会状況を扱った手書きの古文書である。

1. 18世紀テキサスルイジアナ^{ボーダーランズ}境界地域の概観

1.1 ヨーロッパ人入植地の形成

まずは、入植が始まった当初からテキサスとルイジアナが密接な関係を持ったことを確認するため、テキサスとルイジアナの形成過程を概観したい。両地域は、それぞれスペインとフランスが18世紀初期から徐々に、そしてまばらに入植地を築いていった地域である。当時のテキサス地方は、今日のテキサス州の北東部にあたる。この隣が、広大なフランス領ルイジアナであったが、これは1763年のパリ条約でスペイン領となり、1803年のルイジアナ買収で米国領になった。

テキサスルイジアナ^{ボーダーランズ}境界地域は、イギリスとフランスとスペインが、ミシシッピ川流域の領有をめぐる競争するなかで1680年代あたりから次第に形成された。この三カ国間の競争において先手を打ったのはフランスであった。カナダとカリブ海諸国に入植したフラ

(6) Maurine T. Wilson and Jack Jackson, *Philip Nolan and Texas: Expeditions to the Unknown Land, 1791-1801* (Waco: Texian Press, 1987), p. 114.

(7) 本稿では、同アーカイブをBAと略記する。

ンスは、次の二つの目的から、ミシシッピ川流域に次々と入植地を作り始めた。その目的とは、第一にイギリスが北米内陸部に進出するのを食い止めること、第二に鉱物資源に富むヌエバ・エスパーニャ副王領内陸部に侵略することであった⁽⁸⁾。

フランス人による入植政策が進む中、1683年には、スペインの警戒心をあおるような計画が持ち上がった。以前、ミシシッピ川流域を探検した経験を持つシウ・ドウ・ラ・サール(Sieur de La Salle)が、入植希望者とともにフランスを出発し、メキシコ湾からヌエバ・エスパーニャ北東部へと侵略する計画を立てたのである。この計画を実行したラ・サール一団は、1685年、テキサスのマタゴルダ湾(Matagorda)に上陸すると、そこから少し内陸部に入った場所に入植地を築いた。そしてマタゴルダ湾からリオ・グランデ川(Rio Grande)一帯⁽⁹⁾にいた複数の先住民と交易しながら信頼関係を結び、スペイン人が所有する鉱山の場所を尋ねて回った。しかしカランカワ族(Karankawa)は、自分の領土に侵略してきたフランス人を敵とみなし、入植地をたびたび襲撃した。この襲撃により、1689年、ラ・サール入植地は壊滅した⁽¹⁰⁾。

ラ・サールのテキサス遠征が行われていた頃、これに危機感を抱いたスペイン王室は、コアウイラ地方(Coahuila)の総督アロンソ・デ・レオン(Alonso de León)をテキサスに派遣し、フランス人入植地の探索にあたらせた。ヌエボ・レイノ・デ・レオン地方カデレイタ(Cadereyta, Nuevo Reino de León)出身のレオン総督は、17世紀後半、ヌエバ・エスパーニャ北部一帯の開拓を精力的に行う人物として有名であった。レオン率いるスペイン軍は、数年にわたる探索の末、ラ・サール入植地を発見したが、そのとき既に入植地は壊滅していた。1690年になると、一旦コアウイラに戻ったレオン総督は、境界地域の防衛を強化するために、フランシスコ修道会神父と兵士を引き連れて、再度当該地域に遠征した。彼らは、当時ネチェス川(Neches)とトリニダ川(Trinidad)の間で生活していたナベダチェ族(Nabedache)の集落に到着すると、要塞と布教区(mission)を築いた。当時、先住民との友好関係を築くためには、ヨーロッパ製品を供与するという方法がとられた。レオン一団もそうすることで、ナベダチェ族との友好関係を築こうとした。最初の二年間ほどは、コアウイラからヨーロッパ製品が届いたため、両者の関係は良好であった。しかし次第にヨーロッパ製品は届かなくなっていった。またテキサスの場合、土地が乾燥していたため、スペイン人入植者は農業に着手できなかった。農業技術を紹介してプエブロ族(Pueblo)と良好

(8) H. Sophie Burton and F. Todd Smith, *Colonial Natchitoches: A Creole Community on the Louisiana-Texas Frontier* (College Station: Texas A&M University Press, 2008), p. 1.

(9) 当時、コアウイラ地方モンクローバ(Monclova)とサン・アントニオ・デ・ベハル(San Antonio de Béxar)との中継地点であるリオ・グランデ川付近には、リオ・グランデ駐屯地(Presidio de Rio Grande)も存在した。本稿では混乱を避けるため、駐屯地を指す場合には、「リオ・グランデ駐屯地」と表記する。

(10) Robert S. Weddle, "The Wreck of Ships and Dreams: A New Look at the Explore La Salle," in François Lagarde, ed., *The French in Texas: History, Migration, Culture* (Austin: University of Texas Press, 2003), p. 5; David J. Weber, *The Spanish Frontier in North America* (New Haven and London: Yale University Press, 1992), pp. 149-150.

な関係を築くことができたニューメキシコと、テキサスの自然環境は違ったのである。そのため入植者は、農作物を作ることもできず、生活を維持するために先住民に頼らざるを得なくなった。すると両者間の関係は次第に悪化し、スペイン人入植者は結局、ナバダチェ族集落から撤退した⁽¹¹⁾。

こうして17世紀末、スペイン人のテキサスへの入植政策は頓挫し、入植政策が本格的に再開されるのは、再度フランス侵略の可能性が高まった1710年代を待たなければならなかった。この頃までに、フランス人探検家たちは、ミシシッピ川流域に住む先住民たちと、広範な毛皮交易ネットワークを築いていた。特に彼らは、テキサスルイジアナ境界地域において、当時最大勢力のカドー族(Caddo)と友好関係を結んだ。このおかげでフランスは、1714年、テキサスとの境界に位置するナキトシュ(Natchitoches)に入植地を作ることに成功した。この入植計画を率いたのは、フランス系カナダ人軍人で探検家でもあるルイ・ジュシュロー・ドゥ・サン・ドゥニ(Louis Juchereau de St. Denis)である。スペインは、サン・ドゥニがナキトシュよりさらに西側に入植してくるのを恐れた。そのため1716年、ナキトシュから10マイルほど南西に向かった場所にロス・アダエス(Los Adaes)という布教区を築いた。この布教区は二年後、フランス人から攻撃を受けて崩壊したが、その後、スペイン王室は、当時コアウイラ総督であったマルケス・デ・アグアヨ(Marqués de Aguayo)にロス・アダエスの再建を依頼した。危機感を抱いたアグアヨは、兵士や修道士など500人の入植者と、膨大な数の家畜(馬、牛、羊、ヤギ)を引き連れてテキサス入りし、1721年、ロス・アダエスを再建した⁽¹²⁾。こうして、テキサスルイジアナ境界地域には、ロス・アダエス(スペイン領)とナキトシュ(フランス領)という二つの入植地が誕生した。これらの入植地の境界は、その真ん中をはしる小川アロヨ・オンド(Arroyo Hondo)とされた⁽¹³⁾。

1.2 交易の概観

ロス・アダエスとナキトシュでは、ヨーロッパ人の入植が始まった当初から交易が行われ、協調関係がみられた。このように当該地域では、越境的な交易の可能な環境が長年かけて形成されてきたからこそ、1790年代以降、フィリップ・ノーランを始めとする米国人の新参者も、越境的な家畜交易に従事することができた。この点に配慮し、以下では、18世紀当該地域における交易の様相を俯瞰したい。

(11) *Idid.*, pp. 158-160; Martha Menchaca, *Recovering History. Constructing Race: The Indian, Black, and White Roots of Mexican Americans* (Austin: University of Texas, 2001), p. 100.

(12) Burton and Smith, *Colonial Natchitoches* (前注8参照), p. 6; Weber, *The Spanish Frontier in North America* (前注10参照), p. 167.

(13) Burton and Smith, *Colonial Natchitoches* (前注8参照), p. 6; Patricia R. Lemée, "Ambivalent Success and Successful Failures: St. Denis, Aguayo and Juan Rodríguez," in Lagarde, ed., *The French in Texas* (前注10参照), p. 36.

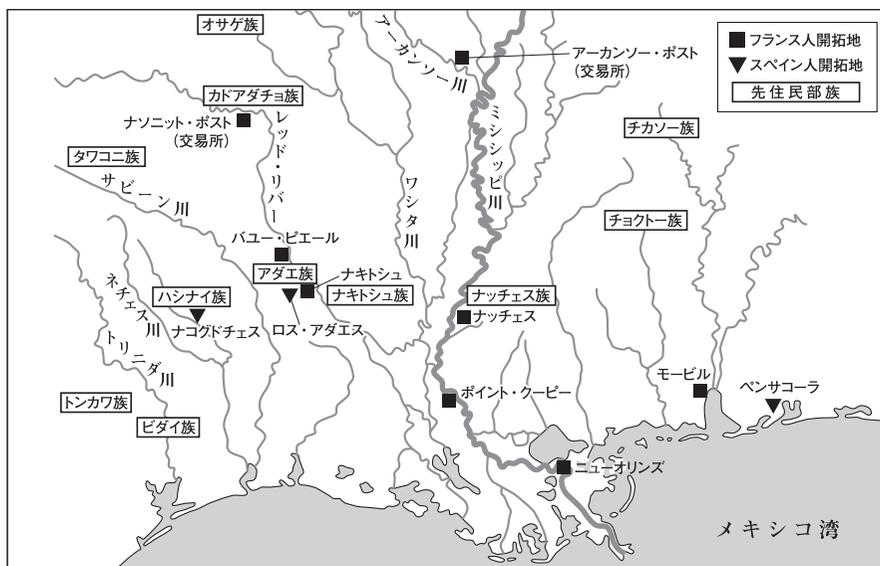


図1 18世紀ルイジアナ低地およびメキシコ湾岸地域⁽¹⁴⁾

まずナキトシュについてである。ここでの先住民との交易は、18世紀前半に繁栄し、スペイン領(1762年以降)になると衰退する、という歴史をたどった。入植地が形成されたばかりの18世紀前半、ナキトシュでは商品農産物を作るシステムが整っていなかった。そのため、先住民との交易が唯一の経済活動であった。もちろん交易のためには潤沢な資金が必要のため、現地に入植したエリート層のフランス人、つまりサン・ドウニとその親族が中心となり、交易活動を手がけた。この交易活動は、スペイン領時代に突入すると、次第に衰退し、社会の底辺層や流れ者の新参者が担うようになった。そして、ナキトシュでは次第に、先住民や黒人と同じ職業につく白人が出現し始めた。先住民との交易が衰退した原因は、主に以下の点あげられる。まずはこの時期、スペイン王室が、ルイジアナにおいてタバコの栽培を促進する政策を実施した。また、疫病により先住民の人口が激減したため、狩りを行いつつ交易に従事する先住民の数自体が減少した。これらの理由から、18世紀前半に先住民と交易し、富と地位を築いて土地も手に入れたナキトシュの上流階級層は、スペイン領時代に突入すると、タバコのプランテーション農業を営むようになったのである⁽¹⁵⁾。

ナキトシュは、ニューオリンズやナッチェス(Natchez)といった商業都市と河川で繋がっていたので、レッド・リバーの上流に住むカドー族、ウィチタ族(Wichita)、コマンチェ族(Comanche)と交易するうえで重要な中継地点となった。これら複数の部族は、当時のテキサスのスペイン人入植地においてはノルテーニョ(Norteños)とも総称された。ナキ

(14) Burton and Smith, *Colonial Natchitoches* (前注8参照), p. 2より筆者作成。

(15) この概要の詳細は、*Idid.*, chap. 5を参照。

トシュは、また、テキサス内陸部にもアクセス可能なため、その周辺に住むアタカパ族(Atakapa)、トンカワ族(Tonkawa)、リパン・アパッチ族(Lipan Apache)⁽¹⁶⁾とも、陸路をつたって交易した。ただし、陸路による交易は、水路と比べると費用や労力がかかるうえ、テキサスに駐屯するスペイン人兵士に逮捕される危険性があった。そのため、ノルテーニョとの交易ほどには栄えなかった⁽¹⁷⁾。

サン・ドウニとその親族は、交易従事者の中でも最上位に位置する卸売商(merchant)であった。彼らは定期的にニューオリンズを訪れ、銃や火薬、ナイフ、毛布、やかん、ブランデーなどのヨーロッパ製品を買い付けた。同時に、陸路で交易品を運ぶのに必要となる馬などの家畜は、ロス・アダエスから密輸した。卸売商はナキトシュに戻ると、先住民と実際に交易する商人(trader)に交易品を配った。これを手に入れた商人は、そこで契約労働者、船員、奴隷、必要に応じて狩人や通訳者を集め、ナキトシュから先住民の集落に、毎年秋になると向かった。先住民集落に到着すると、商人率いる一団は、交易品保管所に物品を保管し、その集落に半年から数年ほど滞在して交易した。先住民は冬に狩りをするので、収穫した毛皮とヨーロッパ製品との交換は春に行われた。商人が先住民から得る物品の中では、バッファロー・ローブが最も高価であった(一枚2 ^{ピアストル}piastres)。シカの毛皮一枚はバッファロー・ローブの約六分の一の価値(35 ^{スー}sous)、熊の獣脂は一壺25 ^{スー}スーだった。先住民はこのほかに、馬・牛などの家畜や、敵対する先住民の奴隷も売った。これらの家畜は、先住民が、テハーノ(テキサス人)の牧場を襲撃して盗んだものである。毛皮などの品物を手に入れた商人は、レッド・リバーの水位が十分上昇する4月ごろにナキトシュに戻り、それらの毛皮を卸売商に売った。卸売商はそれをニューオリンズに運んだ。この交易サイクルを続けることで、サン・ドウニとその親族は巨大な富を築くと同時に、先住民から絶大なる信頼を得た⁽¹⁸⁾。

カドー族を始めとする当該地域の先住民たちは、サン・ドウニのことを「ピエルナス・ゴルダス首長(jefe piernas gordas)」と呼んで慕った。サン・ドウニが亡くなると、彼の息子がナキトシュを統轄したが、このときになるとスペイン王室からの命令で、当該地域の先住民に銃や火薬を渡すことが規制されていった。この主な理由は、武装した先住民によるテキサスの牧場の襲撃を抑制することであった。サン・ドウニの時代に比べて武器を入手しにくくなった先住民たちは、スペイン人に憤慨した。そして彼らは、スペイン人よりもフランス人と親しみ、スペイン人を襲撃し、当該地域から追い出す計画を立てたとい

(16) ComancheやApacheは、北米史研究ではそれぞれ、「コマンチ」「アパッチ」と表記されることが多い。しかし、本稿が対象とする時代はスペイン植民地時代末期であるため、先住民の名称を全てスペイン語表記で統一する。

(17) Burton and Smith, *Colonial Natchitoches* (前注8参照), p. 106.

(18) *Ibid.*, pp. 105-107. カナダにおけるフランス人と先住民との毛皮交易に関しては、木村和男『毛皮交易が創る世界：ハドソン湾からユーラシアへ』岩波書店、2004年。

う⁽¹⁹⁾。人口が少ないスペイン人入植地の人びとは、常にこのような危機的状況に直面していたため、フランスと友好関係にある先住民との関係には神経をとがらせた。

ナキトシュで毛皮交易が栄える一方、ロス・アダエスはテキサスの中でも最辺境に位置したため、入植者があまり増えず貧しかった。しかし、フランスの内部侵略を食い止める、という軍事的な役割を担っていたため、ルイジアナがスペイン領になるまでは、テキサスの首都となった。この頃のロス・アダエスの主要な経済活動は、他のテキサスの入植地と同じく放牧であった。テキサスは、馬や牛、羊などの家畜が繁殖しやすい環境であった。そのため、16世紀のスペイン人探検家たちが残していった家畜や、コアウイラなどの近隣地域への入植者が連れてきた家畜がテキサスで自然繁殖し、18世紀初期までには、野生化した家畜が大量に存在していた。これらの中でもルイジアナとの交易品として重宝されたのが、持ち主のいない小型野生馬メステーニョ (mesteño、英語のmustangの語源)であった⁽²⁰⁾。

家畜は豊富にいたものの、農業に適した場所を見つけることは困難であったため、アダエサーノス(Adaesanos)と呼ばれたロス・アダエスの住民は、トウモロコシや豆といった食糧を、ナキトシュの商人から入手せざるを得なかった。これらの食糧をコアウイラのサルティージョ(Salttillo)から陸路で入手するためには、費用も時間もかかり、また、ラバ追いの運送業者が途中で先住民から襲撃される場合もあった。そのため副王領内陸部から物資を調達することは困難であった。この理由から、スペイン王室は、テキサスに点在する他の入植地がルイジアナと交易することを一切禁じていたが、アダエサーノスだけには特別措置を取った。食糧のみを、ナキトシュから入手することを許可したのである。もちろん、厳格にこの命令を守る住民はおらず、アダエサーノスは、ナキトシュの商人が持つ食糧以外のヨーロッパ製品も家畜と交換して入手した。また、当時副王領では銃や火薬などの武器が不足したため、スペイン人総督や兵士も、ナキトシュの商人から、家畜と引き換えに武器を調達した⁽²¹⁾。さらに二つの入植地では、住民同士の友好的な交流も盛んだった。例えば、ロス・アダエスのスペイン人役人とナキトシュのフランス人役人は、何かの行事のたびに互いに訪問し合い、親しい関係にあったという⁽²²⁾。

こうした18世紀の状況は、次のように総括できる。公的には、ロス・アダエスとナキトシュの間には、スペインとフランスという敵対する勢力の境界線があり、両者間の人の交流や品物の交換は、厳しく制限された。しかしながら、実際にそこに住む人たちにとって

(19) Testim.o de Autos de Pesquisa sobre comercio Ylicito y demas que espresa el superior despacho que está por caveza de ellos, Los Adaes, 10 de febrero de 1751, BA. 当時の史料では、個々の単語に関して、ピリオドを使用した省略表記や誤記がみられるが、本稿ではすべて原文のまま表記する。

(20) Jack Jackson, *Los Mesteños: Spanish Ranching in Texas, 1721-1821* (College Station: Texas A&M University, 1986), p. 4.

(21) Testim.o de Autos de Pesquisa..., 10 de febrero de 1751 (前注19参照)。

(22) Herbert Eugene Bolton, *Texas in the Middle Eighteenth Century* (Austin: University of Texas Press, 1970), pp. 40-41.

は、地図上の境界線はあまり意味をなさなかった。彼らは、互いに足りない部分を補いつつ共存していたのであり、対立というよりも融和的な関係を築いていたのであった⁽²³⁾。

2. ノーランの家畜交易の展開過程

2.1 家畜交易初期の状況とスペインー米国間の軋轢の浮上

このようなテキサスールイジアナ間の相互依存関係は、当該地域に米国人が流入し始めた18世紀末以降も続いた。米国がイギリスから独立して以降、オハイオ盆地周辺には五万人以上もの米国人が移住したと言われている⁽²⁴⁾。これらの米国人は、次第に当該地域に流入し始めたため、スペイン人役人たちは彼らの存在を徐々に危険視するようになった。

境界地域の^{ボーダーランズ}スペイン人役人たちが米国人に警戒するきっかけを作ったのは、フィリップ・ノーランであった。アイルランド出身のノーランが、米国にきた年代や、彼の幼少時代については、史料が残っておらず明らかでない。1788年の時点では、既にケンタッキーに住んでいた⁽²⁵⁾。当時、そこでは、ジェームス・ウィルキンソン (James Wilkinson) がヌエバ・エスパーニャにタバコを輸出していた。この貿易において、ノーランは、ウィルキンソンの右腕としてタバコの運搬と簿記係をまかされており、納品先であるニューオリンズを頻繁に訪れていた。この過程で、彼は、テキサスールイジアナ間で行われている、小型野生馬メステーニョを中心とした家畜交易に興味を抱いたようである⁽²⁶⁾。

ウィルキンソンのタバコ貿易を可能にしたのは、当時ニューオリンズに赴任していたルイジアナ総督エステバン・ミロ (Esteban Miró) と、彼の主計官マルティン・ナバロ (Martin Navarro) の協力だった。ナバロは、ルイジアナ屈指の商人であり、諸外国との貿易を禁止するスペイン王室の法令には反対していた。彼は、ヌエバ・エスパーニャの鉱山地域を外部勢力から守るためには、ミシシッピ川を有効に活用して米国と自由貿易を行い、入植者をさらに誘致して、ルイジアナを発展させる必要があると考えていた。これにミロも賛同し、1780年代後半には、この計画の実行が勸案された。折しも、ウィルキンソンがミシシッピ川を下ってニューオリンズに到着し、タバコを輸出したいと申し出た。その公式な実現には王室からの許可が必要である。そのため、ミロ、ナバロ、ウィルキンソンの三人は話し合いの場を持つのだが、このさいウィルキンソンがある提案を行い、合意に至った。その提案は、以下のように要約できる。まずは、ルイジアナの役人がスペイン王室に働き

(23) *Ibid.*, p. 41; Jackson, *Los Mesteños* (前注20参照), p. 117. 本章では、ヨーロッパ人の入植過程や越境的交易を概観したが、これに加えて、当該地域における人びとの生業や生活、社会構成等を検討することで、この境界地域社会の全体像が浮き彫りになるだろう。しかし、その作業は本稿の範囲を超えるので、今後の課題としたい。

(24) Andro Linklater, *An Artist in Treason: The Extraordinary Double Life of General James Wilkinson* (New York: Walker & Company, 2009), p. 83.

(25) Wilson and Jackson, *Philip Nolan and Texas* (前注6参照), p. 3.

(26) *Ibid.*, pp. 1-2.

かけ、ケンタッキー、テネシー、ミシシッピ北部、アラバマといった地域とルイジアナとの間で、自由貿易が可能となるよう計画を進める。この計画の手始めとして、ウィルキンソンのタバコ貿易を関税なしで許可し、徐々に貿易を拡大する。この間、ウィルキンソンは上記した諸地域の人びとと団結して反乱を起こし、それらの諸地域を米国から離脱させて、スペイン領に編入する。これが、いわゆる「スペインの陰謀」である。この合意の後、ウィルキンソンはスペインの臣民となり、王室のスパイとして仕えた。彼は私腹を肥やすために、スペイン政府も米国政府も裏切るかたちで二枚舌を使い、スパイ活動を行った裏切り者として、米国史の先行研究ではみなされている。ウィルキンソンとスペイン人役人との間の連絡係であったのは、同じくスペイン臣民となったイギリス人、トーマス・パワー (Thomas Power) であった。彼らはスペインから手当てを受け取る代わりに、米国側の情報をスペイン側に伝えていた。一次史料が残っていないため確言できないが、ウィルキンソンの右腕であったノーランも、この陰謀に何らかの形で関与した可能性が高いようだ⁽²⁷⁾。

ウィルキンソンはこのスパイ活動の傍ら、1788年から91年頃にタバコ貿易を展開したが、これは全て失敗に終わり、大きな損失を出した。ノーランは、この失敗がきっかけで、新たな事業としてテキサスルイジアナ間の家畜交易に着目したようである。この交易を行うためには、パスポートや推薦状といった公的な証明書が必要であった。そのためノーランは、当時ウィルキンソンの仲間であったミロからそれ入手し、1791年、陸路でナコグドチェス(Nacogdoches)に向かった。旅の途中に、先住民と交易し、彼らが持つ毛皮や小型野生馬メステーニョと、ヨーロッパ製品とを交換した⁽²⁸⁾。1796年、二度目のテキサス遠征からケンタッキーに戻ったノーランは、ウィルキンソンに宛てた手紙で、初めてテキサス入りしたときの様子を、以下のように記している。

ミロ総督は、あなたに、メキシコでの身の安全を保障するための書類を私に託した、と伝えました。しかしテキサスのスペイン人役人たちは、私たちの予想に反して、私をスパイ呼ばわりしたのです。私は投獄されませんでした。所持品を全て没収され、到着してから一年もしないうちに、森を放浪する先住民のように貧しくなりました。文明社会の全てに幻滅してしまい、私は、そこから永遠に立ち去ろうとしたのです。誰からの支配も受けない、自由奔放で野蛮な生活は、常に私の性分に合っていました。だから私はスペイン人のものを去り、イリノイとサン・アントニオ・デ・ベハル(San Antonio de Béxar)⁽²⁹⁾の間で生活する先住民集落を転々として暮したのです。しかしながら、このような生活は、思っていたより満足のいくものではありませんでした。タワイエ族(Tawaye)とコマンチェ族からは好意を寄せられました。なぜなら、狩りも上手くできましたし、その他のこまごまとした作業もこなしたからです。しかし、最終的に、私は、自分の魂まで先住民化(indianfy)することができ

(27) *Ibid.*, p. 15; Linklater, *An Artist in Treason* (前注24参照), pp. 83-85.

(28) Dumber Rowland, ed., *Encyclopedia of Mississippi History*, vol. 2 (Chicago: S.A. Brant, 1925), pp. 343-344.

(29) サン・アントニオ・デ・ベハルは、当時、テキサス地方の首都だった。

ませんでした。人と社会との結びつきを忘れてはいなかったのです。[……]蛮地を放浪して二年という歳月を失い、ついに道徳性を取り戻した私は、スペイン人のもとに戻り、活動の再開を決意しました。[……]私は狩人になり、毛皮を売り、野生の馬を捕まえて、50頭の馬を連れてルイジアナに向かいました。そこで私は、死者が生還したと言われました。バロン⁽³⁰⁾に守られたのです。その後、サン・アントニオ・デ・ベハルに再度戻ると、今度は250頭の野生の馬を捕まえました。大半の馬はイエロー・ウォーター⁽³¹⁾で失いましたが、一番いい馬はナッチェスで売りさばき、昨日42頭の馬とともに、ここに戻ってきました⁽³²⁾。

このとき、テキサス総督府がノーランをスパイとみなした理由に関しては、史料が残っていないため定かでない。ただし、当時ルイジアナからサン・アントニオ・デ・ベハルに到着する外国人商人はナコグドチェスのそれと比べると比較的少なかったため、全く見知らぬ外国人が突如現れたとしたら、疑いの目で見られたとしてもおかしくはないだろう。

上記の手紙から判断すると、ノーランは1791年にナコグドチェスに到着した後、二度にわたり家畜交易を行った。彼は、所持品を没収された後、先住民集落で二年間放浪したと



図2 19世紀初期コアウイラ地方、ヌエボ・レイノ・デ・レオン地方、ヌエボ・サンタンデール地方、テキサス地方⁽³³⁾

(30) 後述のバロン・デ・カロンデレット (Baron de Carondelet) を指す。ミロの後任としてルイジアナ総督を務めた人物。

(31) 現在のどの土地を指すか不明。

(32) Philip Nolan to James Wilkinson, June 10, 1796, in Malcolm Dallas McLean, ed., *Papers Concerning Robertson's Colony in Texas*, vol. 1 (Fort Worth: Texas Christian University Press, 1974), pp. 6-7. 当時、ニューオリンズやナッチェスにおいてテキサスの馬は一頭50ドルで売られていた。

(33) Vito Alessio Robles, *Coahuila y Texas: Desde la consumación de la Independencia hasta el Trato de Paz de Guadalupe Hidalgo* (México, D.F.: Editorial Porrúa, 1979), p. 8 より筆者作成。

主張しているが、1792年から94年のナコグドチェスのセンサスには、毎年ノーランの名前が記録されている⁽³⁴⁾。そのため、彼は放浪しつつも、ナコグドチェスに時おり戻ったのではないかという推測も成り立つ。テハーノは当時、馬術に長けていたことで有名だったが、ノーランはこの放浪期間中にテハーノや先住民から馬術、および荒野での狩りの仕方を学んだようである。しかし彼は完全に「先住民化」できなかつたせいか、「文明社会」に戻り、1793年頃に、集めた馬50頭を引き連れてルイジアナに戻り、一度目の交易を完了させた。

この一度目の遠征が行われた頃、テキサスに流入する外国人の数は徐々に増え始めていたようだ。おそらくこれを理由に、1792年になると、副王は、テキサス総督に対して、流入する外国人を監視すると同時に、テキサスに居住する外国人の身分や状態、滞在理由を調査するように通達した⁽³⁵⁾。しかし、兵隊の数が限られる中、全ての外国人のスペイン領への出入りを管理することの困難さを、当時ナキトシュに駐在していたスペイン人役人は次のように吐露している。「私が担当する地域においては、上からの命令を厳守していません。しかし、米国人はこの命令を承知のうえで、ナコグドチェスに密かに侵入しており、私はそれを制御できないのです。ナキトシュとナコグドチェスの近隣地帯に何年間も居住する先住民は、これらの米国人をかくまっています。そこで米国人は、恐ろしい行動をとっています。彼らは、牛をほとんど所有していないという理由で、生活するために馬を殺したり、この地方から遠く離れた土地で売るために馬を盗んだりするなど、好き放題に生きています⁽³⁶⁾」。当該地域のスペイン人役人たちは、許可を得ずに先住民集落で馬を集める外国人に対しては、1793年という比較的早い時期から不満を抱いていたようである。

1790年代初期に、パスポート無しでスペイン領に流入する米国人の数が具体的に分かる史料はない。しかしながら、アントニオ・ヒル・イバルボ(Antonio Gil Ibarbo)が副王の命令に従って作成した報告書からは、当時公式にナコグドチェスに滞在または居住していた外国人の数を知ることができる。イバルボが把握する限り、1792年5月の時点での外国人合法滞在者は30名であった⁽³⁷⁾。一方、1792年ナコグドチェスのセンサスに記載された世

(34) Prob.a de los Texas Jurisdion del Pueblo de Nuestra Señora del Pilar de Nacogdoches Estado que manifiesta el Numero de Basallos que tiene el Rey en la Expresada Jurisdiccion de Todo sexo y castas, 31 de diciembre de 1792, BA; Pueblo de Ntra Sra del Pilar de los Nacogdoches. Padron de las Almas que tiene este Pueblo en 31 de Diz.re de 1793, BA; Pueblo de Ntra Sra del Pilar de Nacodoches, 31 de disiembre de 1794, Padron de las almas que tiene este pueblo en 31 de diembre del Presente año, BA.

(35) El Conde de Revilla Gigedo al Gobernador de la Provincia de Tejas, Méx.co, 17 de abril de 1792, BA.

(36) Luis DeBlanc al Sor. Don Manuel Muñoz, Natchitoches, 26 de abril de 1793, BA; Luis de Blanc to Muñoz, discussing the policies against the introduction of British-American Subjects in the provinces of Louisiana and Texas, Bexar Archives online [http://www.cah.utexas.edu/projects/bexar/gallery_doc.php?doc=e_bx_019454] (2013年7月28日閲覧).

(37) Antonio Gil Ybarbo, Nacogdoches, 12 de mayo de 1792, BA. なお、報告書の30名のリストの最後に「ドン・フェリペ」という名が記されており、これはノーランに該当する可能性がある。しかし、ここでは姓が記載されていないため、実際にノーランを指すのか定かではない。

帯主男性の数は142人である⁽³⁸⁾。この数の中に、イバルボの把握する30名全員が含まれていると仮定した場合、約21%の男性が外国人となる。これら外国人合法滞在者は、ニューオリンズの駐屯地から脱走してきた兵士や、大工や商人としてルイジアナからやってきた者であった。ロス・アダエスが放棄されて以降その周辺には人が住んでいなかったとの理由から、パスポートを取得してナコグドチェスに移住した。大半の者は現地の女性と結婚して家庭を持った⁽³⁹⁾。当該地域に滞在する外国人の中には商人が多かったためか、先住民集落で生活する商人の特徴について、イバルボは次のように述べている。「彼らは、先住民と同じ習慣を身に付けています。腰布を身に着け、バッファロー革で体を覆っているのです。また、先住民と同じく踊り歌い、先住民女性と結婚し、飽きると違う女性を妻にし、共同の鍋を囲んで先住民と食事をとります。これら全ての行動は、先住民と良き交易を行い、また、彼らから良き扱いを受ける、という目的のためなのです。この種の人びとは、[……]緊急時や公共善のために役立つことはなく、武力を行使して抑えこまない限り、悪しき存在例であり続けます」⁽⁴⁰⁾。ノーランは、一度「先住民化」を試みたことと述べていたので、先住民集落では、イバルボが描く商人と同様の生活を送っていたのかもしれない。イバルボは、これらの商人を「悪しき存在例」とみなしており、良い印象を持たなかった。

先住民集落に出入りする商人全般に対するイバルボの印象とは反対に、当該地域のスペイン人役人たちは当時、ノーランに対して好感を抱いていた。一度目の遠征を終えたノーランは、すぐに二度目のテキサス遠征を行ったが、このさい、彼にパスポートを発行したのは、ミロの後任のルイジアナ総督バロン・デ・カロンデレットであった。彼によると、ノーランは「才能があり希望にあふれた若者」であり、ルイジアナの住民が必要とする馬をテキサスから集めてくる、という目的のもと、パスポートが発行された⁽⁴¹⁾。このパスポートを携えたノーランは、一人の黒人奴隷と五人のルイジアナ住民を連れてナコグドチェスに向かった。そしてそこで副総督にパスポートを提示し、メステーニョを集める許可を得たため、ノーランはカウボーイなど現地の住民を何人か雇い、テキサスの首都サン・アントニオ・デ・ベハルに向かった⁽⁴²⁾。そこでは、テキサス総督マヌエル・ムニョス(Manuel Muñoz)に謁見し、ニューオリンズから交易品を取り寄せるための請願を行った。なぜならば先住民と交易する場合、それが公式に認められないと、非合法交易として逮捕される可能性があったからである。ムニョスが、この請願を彼の上司でチワワ(Chihuahua)に駐在する総司令官ペドロ・デ・ナバ(Pedro de Nava)に伝えると、ナバは、ノーランの請願に対

(38) Prob.a de los Texas Jurisdion del Pueblo de Nuestra Señora del Pilar de Nacogdoches Estado que manifiesta el Numero de Basallos..., 31 de diciembre de 1792 (前注34参照).

(39) Antonio Gil Ybarbo..., 12 de mayo de 1792 (前注37参照).

(40) *Ibid.*

(41) Baron de Carondelet a Manuel Muñoz, Nueva Orleans, 9 de septiembre de 1794, BA.

(42) No 4. Año 1794. Quaderno de Correspondencia del Sor Governador Comand.te Gral Brig.er Don Pedro de Nava. No.171, Manuel Muñoz a Pedro de Nava, 6 de junio de 1794, BA.

して都合のよい対応を取るよう、ムニョスに返答した⁽⁴³⁾。ムニョスは、ノーランが親スペイン派の先住民に銃などのヨーロッパ製品を配ることを期待していたため、彼の交易活動に対する反感は抱いていなかったようだ⁽⁴⁴⁾。その後、1796年になると、ノーラン一行は二度目のテキサス遠征を終え、250頭の馬とともにニューオリンズに戻った。

ノーランがテキサスに現れた時期は、国際情勢が目まぐるしく変化し、その余波がテキサスにも及び始めた時期であった。この頃ヨーロッパではフランス革命が起こり、1793年からフランスとスペインは戦争を開始した。この影響で、当該地域ではルイジアナの住民が蜂起し、先住民とともにスペイン領に侵略する可能性が懸念されたため、テキサスに入る外国人への監視は次第に強まった⁽⁴⁵⁾。1795年になると、当該地域のスペイン人役人たちは、さらなる問題に直面した。スペインと米国が、両国の境界線を定めるサンロレンソ条約(ピンクニー条約)を締結したのである。これにより米国は、スペイン領東西フロリダ以北の土地を領有し、ミシシッピ川の通行権を確保した。そして、新たに米国領となった地域に駐屯していたスペイン軍は、そこからの撤退を余議なくされたのである。しかし、ルイジアナに駐在するスペイン人役人たちは希望を持ち続けた。彼らは、ケンタッキー在住のウィルキンソンら複数のスパイと協力し、米国西部をスペイン領にすることが可能だと考えたのである。こうした期待があったため、カロンデレットは1797年、ノーランに対し、三度目のテキサス遠征を許可するパスポートを与えた。ノーランは、同年7月頃、八人の仲間(米国人二名、スペイン人四名、黒人奴隷二名)とともに、ライフル12丁と七千ドルの価値がある交易品を携えてテキサスに向かった⁽⁴⁶⁾。この時期、テキサスではメステーニョの数が減少していた。これが原因で、ノーランはテキサスのみならずヌエボ・サンタデー地方(Nuevo Santander)まで南下して、馬を集めた⁽⁴⁷⁾。

この三度目のテキサス遠征中、スペイン人役人のノーランに対する眼差しは急激に変化した。カロンデレットはこの間、「スペインの陰謀」を実行に移すために、トーマス・パワーに陰謀の詳細を記した手紙と準備金10万ドルを託し、ウィルキンソンにそれを届けさせようとした。そしてウィルキンソンが志願兵とともに蜂起する準備を整えたときに、カロンデレットは再度同じ額をウィルキンソンに送る予定でいた。しかしこの計画は、パワーがウィルキンソンのもとに到着する途中で暴かれてしまい、パワーは米国当局に逮捕され

(43) Pedro de Nava a Manuel Muñoz, 27 de enero de 1795, BA.

(44) Wilson and Jackson, *Philip Nolan and Texas* (前注6参照), p. 14.

(45) Pedro de Nava al Gobernador de Texas, Chihuahua, 9 de julio de 1793, BA.

(46) El Baron de Carondelet a Andres Lopez Armesto, Nueva Orleans, 17 de junio de 1797, "Documents relative to the doings of Philip Nolan in Texas and Nuevo Santander, and the disposition made of his companions, 1797-1803," *Historia* 413 part 1, p. 190, 2Q189, Archivo General de la Nación (University of Texas at Austin) (以下、同アーカイブをAGN-UTと略記).

(47) Pedro de Nava a Marques de Branciforte, Chihuahua, 20 de marzo de 1798, *Historia* 413 part 1, p. 189, 2Q189, AGN-UT.

た。さらに1798年には、スペインに味方し蜂起するはずであったウィルキンソンが、米国政府からの命令で、スペインとの境界地域に米国陸軍予備隊を新たに組織するという任務を引き受け、ナッチェスに赴任した。当時、ナッチェスのスペイン駐屯地の司令官であったマヌエル・ガヨソ(Manuel Gayoso)は、陰謀の共謀者の一人であった。ウィルキンソンがナッチェスに赴任すると、彼は陸軍隊員とともに米国への忠誠を表明するパレードを行った。そのためガヨソは、ナッチェスから撤退せざるを得なくなったのである⁽⁴⁸⁾。

もはや、スペインが米国西部を併合するという秘密裏の計画を実行に移す道は絶たれてしまった。ナッチェスを追い出されたガヨソは、この後すぐに、カロンドレットの後任としてルイジアナ総督となり、ニューオリンズに赴任した。すると、ナッチェスでの屈辱的な体験から、ウィルキンソンやノーランに対する不信感を露わにするようになった。特にノーランは、度重なるテキサス遠征で、他のどの米国人よりもテキサスの地理に精通しており、テキサスルイジアナ間の正確な地図を完成させるとカロンドレットに約束していた⁽⁴⁹⁾。ガヨソにしてみれば、外国人がスペイン領テキサスの詳細な地図を作製することは承服し難かった。加えて、ノーランがテキサスに滞在した1790年代初頭から半ばは、イギリスからの支援を取り付けた米国人が先住民とともに反乱を起し、フロリダからニューメキシコまでの地域を制圧しようとする計画が立てられた時期でもあった(「ブラウントの陰謀」と称され、1797年に頓挫した)⁽⁵⁰⁾。1798年には、フランスー米国間の緊張関係が高まったため、この影響で米国がスペインに対して宣戦布告し、米国軍がテキサス経由でヌエバ・エスパーニャ内陸部に進軍する可能性が指摘された⁽⁵¹⁾。さらに、1799年には、ボウルズ(Mr. Bowels)という男性がフロリダとルイジアナの先住民と結託して反乱を起し、これらの地域を英国領にしようとする計画がテキサス総督に寄せられた⁽⁵²⁾。これらの要因が重なり、当該地域のスペイン人役人たちは、テキサス入りする外国人への警戒を次第に強めた。なかでも、ノーランは、ウィルキンソンの右腕でありテキサスの地理を熟知しているため、最大の危険分子と目されるようになった。ノーランは1799年、無事に三度目のテキサス遠征からナッチェスに戻ったが、次のテキサス遠征を行う場合、スペイン人役人からパスポートを入手できる望みはなかった⁽⁵³⁾。

(48) Wilson and Jackson, *Philip Nolan and Texas* (前注6参照), pp. 29-31.

(49) Nolan a Rendon, 25 de noviembre de 1797, Historia 413 part 1, pp. 196-197, 2Q189, AGN-UT.

(50) Pedro de Nava a Marques de Branciforte..., 20 de marzo de 1798 (前注47参照), p. 187.

(51) Nava al Gobernador de Texas, Chihuahua, 28 de agosto de 1798, BA.

(52) Nava al Gobernador de Texas, Chihuahua, 20 de noviembre de 1799, BA.

(53) ノーランがスペインー米国間の軋轢に巻き込まれていった詳しい過程は、Wilson and Jackson, *Philip Nolan and Texas* (前注6参照), chap. 2を参照。

2.2 最後のテキサス遠征

ドン・フェリペ・ノラン[フィリップ・ノーラン]は狡猾な人間です。バロン・デ・カロン・デレットからの信頼を利用してベハル[サン・アントニオ・デ・ベハル]行きのパスポートを入手したのであり、完全な偽善者です。米国にいるときにはカトリックを嘲笑し、私たちの土地で生活するときにはカトリックを信奉しました。[……]彼は抜け目のない先住民のように森を熟知しているため、我が国に関して完璧な知識を得るようにウィルキンソン将軍から命令されているのだと疑いました⁽⁵⁴⁾。

ヌエバ・エスパーニャ最北部の諸地域全体を統轄していたペドロ・デ・ナバは、ノーラン一団がテキサスに向かった1800年11月、副王に対して上記の報告を行った。当初、現地のスペイン人役人たちはノーランに好意を抱いたが、スペインー米国間に軋轢が生じて以降、彼らはナバの意見に代表されるように、ノーランの行動に疑念を抱き始めた。ノーランへの不信が募った結果、最終的にスペイン人役人はノーランの活動を阻止するために、軍隊を派遣することになった。そして1801年3月、スペイン軍はノーラン一団が荒野で馬を集めて生活していたところを襲撃した⁽⁵⁵⁾。

この襲撃で幕を閉じる最後の遠征に関しては、テキサス総督府が警戒を強めたため、一次史料が豊富に残っている。主な一次史料としては、次の二種類がある。一つ目は、ノーランの交易に関わった遠征隊員の裁判記録である⁽⁵⁶⁾。もう一つは、1801年のノーラン一団逮捕以降、1810年代までメキシコに滞在し、メキシコ独立運動にも参加したエリス・ビーン(Ellis Bean)の回顧録である⁽⁵⁷⁾。これらの一次史料は、先住民との関係を示す記述が少ないものの、当時のスペイン領境界地域における越境的な家畜交易の様子を詳しく知ることができる。以下では、これらの一次史料に依拠しつつ、最後の遠征の展開過程を時系列的に明らかにしたい。

四度目の遠征については、関係者が大勢おり、情報が複雑なため、まずは主要人物を整

(54) Pedro de Nava, Chihuahua, 25 de noviembre de 1800, Historia 413 part 1, p. 218, 2Q189, AGN-UT. なお、本稿においてスペイン語史料を引用する場合は、フィリップ・ノーランを「フェリペ・ノラン」と表記する。

(55) Nava al Gobernador de Texas, 17 de marzo de 1801, BA.

(56) Expediente concerning the trial of Nolan's men at Nacogdoches, 1801, Philip Nolan Papers 793, 2Q241 (University of Texas at Austin); Ynformacion expuesta por ocho testigos acerca de la conducta de Antonio Leal, de su muger Getrudis de los Santos, la amistad, trato, y comunicasion que estos dos han tenido con Don Felipe Nolan, Philip Nolan Papers 794, 2Q241 (University of Texas at Austin); Provincia de Texas Año de 1801, Numero 168, Criminal Contra el Americano Santiago Cook, Antonio Leal, su Muger Getrudis de los Santos y el Frances Pedro Geremias Longueville indiciados de correspondencias secretas con Don Felipe Nolan. Juez Fiscal Sor. D.n Juan Baut.a de Elguézabal, Ten.e Cor.l y Gov.or de la Prov.a de los Texas, 23 de enero de 1801 a 11 de septiembre de 1801, BA.

(57) "Memoir of Colonel Ellis P. Bean," in H. Yoakum, Esq., *History of Texas from its First Settlement in 1685 to its Annexation to the United States in 1846*, vol. 1 (Austin: Steck Company, 1935), appendix 11, pp. 403-455. 最後のノーランのテキサス遠征に対する各地のスペイン人役人たちの対応は、次を参照。"Documents relative to the doings of Philip Nolan in Texas and Nuevo Santander, and the disposition made of his companions, 1797-1803," Historia 413 part 1 and 2, 2Q189, AGN-UT.

理して確認したい。ノーランの家畜交易に関わった人物は、大まかに二つのグループに分けられる。第一のグループは、ナコグドチェスを拠点としてノーランとは別行動をとり、ノーランが必要とする家畜を集め、その世話をした者たちである。第二のグループは、ナッチェスでノーランの遠征隊に加わり、ノーランと一緒にテキサスの先住民集落に赴き、メステーニョを集めた人びとである。前者と後者のグループに属する人物の詳細は、以下の通りである⁽⁵⁸⁾。

【第一のグループ：ノーランと別行動をとった人物】

ジェス(サンティアゴ)・クック(Jesse (Santiago) Cook)

ピエル(ペドロ)・ロングビル(Pierre (Pedro) Longueville)

アントニオ・レアルとヘトルデイス・デ・ロス・サントス夫妻(Antonio Leal, Getrudis de los Santos)⁽⁵⁹⁾

ホセ・デ・ロス・サントス(José de los Santos) (上記ヘトルデイスの兄弟)

【第二のグループ：ノーラン遠征隊に加わった人物】

—スペイン人—

ルシアノ・ガルシア(Luciano García)、39歳、レアル・デ・チャルカス(Real de Charcas)出身、ナコグドチェス在住⁽⁶⁰⁾

ビセンテ・ララ(Vicente Lara)、38歳、オルコキサク駐屯地(Orcoquisac)出身、サン・アントニオ・デ・ベハル在住

レフヒオ・デ・ラ・ガルサ(Refugio de la Garza)、25歳、ヌエボ・レイノ・デ・レオン地方カデレイタ出身

フアン・ホセ・マルティネス(Juan José Martínez)、30歳、ヌエボ・レイノ・デ・レオン

(58) 以下の人物情報は、Philip Nolan Papers 793, 2Q241 (University of Texas at Austin) に収録の史料から得られたもの。なお、個々人の宗教は、明示されている者のみ記載した。

(59) 1793年のサン・アントニオ・デ・ベハルのセンサスに基づくと、レアル一家の詳細は以下の通りである。ドン・アントニオ・レアル、スペイン人、サン・アントニオ・デ・ベハル出身、47歳。妻ヘトルデイス・デ・ロス・サントス、スペイン人、前者と同じ出身地、35歳。三歳の娘一人。混血(ムラート)で未亡人の使用人一人、22歳。使用人の息子二歳、娘一歳。No. 201, Pardon de las almas que ay En esta Villa de San Fernando de Austria, año de 1793, 31 de diciembre de 1793, BA. ここで“Austria”と表記されているが、これは“Béxar”を指す。「サン・フェルナンド・デ・ベハル」は、軍人以外の一般人の居住区であり、「サン・アントニオ・デ・ベハル」はスペイン軍駐屯地であった。これら二つの地区は隣接し、ひとつの村社会を形成していた。テキサスは副王領内陸部の防衛という軍事的機能を担っていたことから、本文では「サン・アントニオ・デ・ベハル」に統一する。

(60) 1792年のナコグドチェスのセンサスでは、彼は30歳の先住民で、職業はカウボーイ、コアウイラ地方のサン・ニコラス(San Nicolas)出身、フアナ・デ・アコスタ(Juana de Acosta、先住民、29歳)と結婚、と記されている。Prob.a de los Texas Jurisdion del Pueblo de Nuestra Señora del Pilar de Nacogdoches Estado que manifiesta el Numero de Basallos..., 31 de diciembre de 1792 (前注34参照)。

地方サリナス(Salinas)出身、ナコグドチェス在住⁽⁶¹⁾

ロレンソ・イノホサ(Lorenzo Hinojosa)、31歳、ヌエボ・サンタンデール地方カマルゴ(Camargo)出身、サン・アントニオ・デ・ベハル在住

ホセ・ベルバン(José Verbán)、19歳、ナコグドチェス出身

ホセ・デ・ヘスス・デ・ロス・サントス(José de Jesús de los Santos)、年齢不詳、ラ・バイア・デル・エスピリトゥ・サント駐屯地(La Bahía del Espíritu Santo)出身

—米国人—

サイモン・マコイ(Simon McKoy)、23歳、オペルーサス(Opelousas)出身、ナッチェス在住歴五年、カトリック信者

ジョナ・ワターズ(Johan Watters)、25歳、バージニアの州都出身、プロテスタント信者

ザルモン・クーリー(Zalmon Cooley)、25歳、ケンタッキー出身、ナッチェス在住歴二年、カルヴァン派信者

エリス・ビーンズ(Ellis Bean)、22歳、ノースカロライナ出身、ナッチェス在住歴一年、プロテスタント信者

ジョセフ・リード(Joseph Reed)、26歳、ペンシルベニアの州都出身、ナッチェス在住歴一年半、カルヴァン派信者

ウィリアム・ダンリン(William Danlin)、17歳、ペンシルベニア出身、ナッチェス在住歴11年、カトリック信者

チャールズ・キング(Charles King)、27歳、メリーランド出身、ナッチェス在住歴一年半、バプティスト信者

スティーブン・リチャーズ(Stephen Richards)、19歳、ペンシルベニア出身、ナッチェス在住歴11年、カルヴァン派信者

ジョセフ・ピアース(Joseph Pears)、22歳、ノースカロライナ出身、ナッチェス在住歴一年半

トーマス・ハウス(Thomas House)、25歳、バージニア出身、ナッチェス在住歴一年九カ月、プロテスタント信者

エフライム・ブラックバーン(Emphraim Blackburn)、35歳、メリーランド出身、ナッチェス在住歴五年

デビット・フェロ(David Fero)、24歳、ニューヨーク出身、ナッチェス在住歴一年半

ロバート・アシュリー(Robert Ashley)、38歳、サウスカロライナ出身、ナッチェス在住歴八年

(61) 前注の1792年ナコグドチェスのセンサスでは、彼は36歳のスペイン人で、職業は使用人、モンテレイ(Monterrey)出身、マリア・デ・ロス・サントス(María de los Santos、サン・アントニオ・デ・ベハル出身のスペイン人、25歳)と結婚、と記されている。

ジョン・ハウス(John House)、21歳、バージニア出身、ナッチェス在住歴一年
マイケル・ムーア(Michael Moore)、25歳、アイルランド出身、ナッチェス在住歴六年
フアン・バウティスタ(Juan Bautista)、46歳、黒人(通称セサル)、フランス領グレナダ出身、カトリック信者
ロバート(Robert)、黒人、メリーランド出身、ナッチェス在住歴二年

— テキサスへの途上で逃亡した者 —

モルデカイ・リチャーズ(Mordecai Richards)、ジョン・キング(John King)、オーガスト・アダムズ(August Adams)

最後の遠征を組織するさい、ノーランは、スペイン人役人たちの疑念を承知していた。しかし、これまでノーランが集めたメステーニョの一部はテキサスに残されていたため、スペイン人役人から許可を得られないとしても、テキサスに向かうつもりであった。それを意識してか、遠征隊は以前より大規模な編成となった。このような大胆な行動にでたのも、スペイン軍からは絶対に捕まらない、という自信があったからである。その自信は、ノーランがナッチェスで遠征隊の準備を整えたさい、テキサスで彼の馬の世話をするパートナー、ジェス・クック宛てに送った以下の手紙によく表れている。

サントス[ノーランの使用人]が、私の西部への遠征計画を漏らしたようだ。当初の計画では、ナコグドチェスの北を通ってリオ・グランデ川まで行くつもりだった。しかし、この計画は知られてしまったので、ナコグドチェスの兵士たちに捕まらないように、沿岸部を通って行くつもりだ。

君と私は固い友情で結ばれている。秘密は守ってもらいたい。

私はたくさんの交易品とともに、そちらに向かう。だから、私がメステーニョを集めにきた、と全員が思うはずだ。

1月には米国に戻る予定である。

この手紙を受け取ったら直ちに、私たちの馬を集めてそこから出発するように[ルイジアナに向けて]。そうしないと、全ての馬を失うことになる。ビダル⁽⁶²⁾が私の計画を承知しており、既にその情報をナコグドチェスに流したようだ。しかし、私は恐れない。才能のある男たちと一緒に。絶対に捕まることはない。

オペルーサスからリオ・グランデ川まで続く沿岸部の道を、私は熟知している。だから彼らは、絶対に私たちを発見して攻撃することはできない。レビージャ(Revilla)⁽⁶³⁾の準備は既に整えておいたため、そこには二日も滞在しないだろう。

この手紙を読み終えたら、直ちに燃やすように[下線筆者]⁽⁶⁴⁾。

(62) 後述のホセ・ビダル(José Vidal)を指す。

(63) リオ・グランデ川近くの入植地。

(64) Nolan to Cook, October 21, 1800, Papeles de Cuba, Legajo 71 A, Archivo General de Indias (Microfilm, University of Texas at Austin).

この手紙で言及されるサントスの他にも、ノーランの活動を密告する人物がいた。ミシシッピ準州で保安官を務めるルイス・エバンス(Luis Evans)であった。スペイン軍は、ナッチェスから撤退した後、そこから最も近いスペイン領土にコンコルディア(Concordia)という駐屯地を築いた。この駐屯地には、ガヨソとの入れ替わりでホセ・ビダルが赴任してきたのだが、彼がエバンスと情報交換し、ノーランの行動を追っていた(ガヨソは1799年に死去)。ノーランの計画を把握したビダルは、ルイジアナ総督カサ・カルボ(Casa Calvo)に対して次の手紙を送った。

ミシシッピ準州在住のドン・フェリペ・ノランは、現在、メキシコ王国の砂漠に行き、そこで、米国で売りさばくためのメステーニョを可能な限り多く集めるための準備を進めています。確かな情報筋によると、彼は既にカービン銃を持つアメリカ人たちを集めたので、彼らの行く手を阻もうとする者から身を守り、目的地へと進むことができるそうです。遠征隊は30人から40人で編成される模様であり、うち六人から八人はメキシコ王国のスペイン人です。彼らはいく最近、ノランがミシシッピ準州に千頭の馬を連れて来たとき、それに付き添った者たちです。彼は、ルイジアナとテキサスのスペイン人入植地は通過せずに、ラス・アルカス(Las Arcas)の南のとある場所に向かう予定です。そこは、私たちが今まで一度も訪れたことのない場所であり、たくさんの従順な先住民とメステーニョがいるようです。

[……]私の意見を率直に申しますと、もし彼らの出発をすぐに遮らなければ、この地方ばかりでなくメキシコ王国にまでも悪い影響を及ぼすでしょう。ノランは才能に恵まれ、大胆不敵かつ活動的な人物であり、さらに、これらの場所については、現地に住む者よりも完璧な知識を有しています。ノランに付き添う者たちは、近い将来、ノランと同じ交易を始めるでしょう。そしてこれらの米国人は、少しずつ閣下の領土に注目するようになり、最終的には、その領土に住む臣民たちに与えられた素晴らしい恵みの数々を、全て略奪してしまうでしょう⁽⁶⁵⁾。

ノーランが当該地域で家畜交易を始めた1790年代当初、スペイン人役人たちは、ルイジアナで馬が必要との理由から、ノーランの交易活動を許可した。スペイン人役人たちは、ノーランを彼らの協力者とみなしたのである。しかし、スペインー米国間に軋轢が生じて以降、スペイン人役人たちはノーランを、スペイン領土の家畜や資源を奪う略奪者と認識するようになった。

最後のノーラン遠征隊の実際の規模は、ビダルが予想したよりは小規模であったが、スペイン人以外のメンバーが皆、カービン銃や猟銃、ピストルを携えていたのは確かだった。特にノーランは、ピストル二丁、二連発ショットガンとカービン銃をそれぞれ一丁、身に付けていた。ビダルは、今回の遠征を阻止できなければ、後ほどテキサスに向かう米

(65) Sobre las noticias de Don Felipe Nolan en las Provincias Ynternas, José Vidal a Casa Calvo, Concordia, 27 de septiembre de 1800, Historia 413 part 1, p. 208, 2Q189, AGN-UT.

国人がさらに増加し、副王領を脅かすことになると考えた。それゆえ、彼は、ノーラン一団の出発を阻むべく、米国のミシシッピ最高裁判所に訴訟を起こした。訴訟の理由は、ノーランがパスポートを持たないこと、また、武装しており敵対的な行動にでる可能性のあること、であった⁽⁶⁶⁾。しかし判事は、ノーランの敵意を示す明確な証拠がないため、米国政府は彼の遠征を阻止することはできない、として、この訴えを退けた。ただし彼は、①万が一ノーランがスペイン領で攻撃的な行動にでた場合、スペイン政府が決定した刑罰を受けなければならないこと、②彼が米国に逃亡すれば、スペインに彼の身柄を引き渡すこと、③スペインと先住民との友好関係を妨害した場合も、違法行為とみなす、との内容を付け加えた⁽⁶⁷⁾。

もはや、ノーランの出発をスペイン側が法的に阻止する術は残っていなかった。彼は遠征隊員とともに、ナッチェスを後にした。遠征が成功した場合、ノーランは米国人隊員各人に対して、三カ月契約で六頭のメステーニョ、三カ月を超過した場合一日一ペソの報酬を約束した。隊員の主たる仕事は馬の世話であった⁽⁶⁸⁾。彼らがノーラン遠征隊に加わった理由および目的は明らかではないが、唯一、エリス・ビーンの証言は残っている。ノースカロライナに属した頃のテネシーに生まれた彼は、17歳のときに「旅に出て他の世界を見たいと思うようになった」という。ビーンは若かったため、彼の父は最初、この考えに反対した。しかし、ナッチェスが米国領になると、テネシーの商品がそこで高く売れることを知り、ビーンがウイスキーと小麦を売りにナッチェスまで行くことを、彼の父は許したという。この後、ビーンはナッチェスの親戚のもとで生活するようになり、ある日ノーランから誘われて遠征隊に参加した。ビーンは、外国への興味と経済的な理由から、遠征隊に参加したようである⁽⁶⁹⁾。

ノーランは、当初予定していた沿岸部は通らず、カドー族の集落を通過してナコグドチェスに向かうことにした。なぜなら彼は、クックに宛てた手紙がスペイン人役人の手に渡った可能性を想定したからである(実際にスペイン人役人はこれを入手した)。出発のさい、ノーラン一団は交易品をほぼ持たなかった。携行品を減らすことで、目立たず短期間で目的地に到着したかったのかもしれない⁽⁷⁰⁾。いずれにせよ、今回の交易品は、スペイン

(66) Joseph Vidal to Governor Sergeant, October 10, 1801, Philip Nolan Papers 793, 2Q241 (University of Texas at Austin).

(67) Wilson and Jackson, *Philip Nolan and Texas* (前注6参照), pp. 157-158.

(68) Philip Nolan Papers 793, 2Q241 (University of Texas at Austin)では、スペイン人隊員の証言は、残念ながら全員分が紛失している。そのため彼らのノーランとの契約や、彼らとノーランとの関係については不明である。

(69) “Memoir of Colonel Ellis P. Bean” (前注57参照), pp. 403-404.

(70) Philip Nolan Papers 793, 2Q241 (University of Texas at Austin)に収録された裁判記録によると、遠征隊メンバーは出発のさいに以下の「生活必需品」を所持していた。小麦、酒、毛布、衣類、スコップ、皮、コットン、ナイフ。これらの物品について、全ての隊員が「交易品ではない」と証言しているが、偽証の可能性も考えられる。

語、フランス語、英語を自由に操ることのできるジョン・ヘンダーソン (John Henderson) が預かった。ヘンダーソンは、ナコグドチェス近くまで河川をつたって移動し、その後陸路でナコグドチェスに向かい、現地に滞在するノーランの使用人に交易品を渡す予定だった。スパイからこの情報を得たビダルは、ラピデス (Rapidez) に到着したヘンダーソンを捕らえた。ノーラン遠征隊は、この後、ナコグドチェス付近の先住民集落に長期滞在中にスペイン軍から襲撃される。これは、ヘンダーソンの逮捕をノーランが知らないまま、交易品の届くのを待っていたからのようだ。もしヘンダーソンが無事ナコグドチェスに到着していたら、ノーランが無事短期間で遠征を終えた可能性もあった⁽⁷¹⁾。

ヘンダーソンがナコグドチェスに向かう頃、ノーラン遠征隊はワシタ駐屯地 (Ouachita) 近くにさしかかったが、ここで彼らは小規模のスペイン軍に遭遇した。このスペイン軍は、本来であれば隊員たちを逮捕すべきであったが、隊員全員が武器を携えていたので、衝突を避け尋問しなかった。するとノーランは、パスポートを持っておらず、それを提示しないままテキサスに向かう、との手紙をスペイン軍司令官に書き残し、その場を後にした⁽⁷²⁾。

当初、遠征隊員の大半は、ノーランがパスポートを所持していると考えたようだ。しかし、ノーランとワシタ駐屯軍とのやり取りを見たハウス兄弟とアシュリー、ムーアは、ノーランのパスポート所持を疑った。そのためトーマス・ハウスがノーランに問い質したが、ノーランは次のように答えた。「この件について、今後の詮索を許さない。ここには暴力以外の法律など存在しない。もし誰か一人でも逃げ出したら、ロシアノがどこまでも追いかけて、そいつを捕まえた後、犬のように吊るす」⁽⁷³⁾。

モルデカイ・リチャーズも、ワシタ駐屯軍とのやり取りを不自然に思い、ノーランに説明を求めた。リチャーズは、遠征隊を指揮する第三の人物で、地形にも詳しいことから信頼を得ていた。そのためノーランは、彼には詳細に説明した。

私の計画を実行するうえで、あなたを頼りにしている。[……]もし私たちの計画が成功すれば、あなたの将来も、あなたの家族の将来も保証される。将来この経験が必ず利となることをあなたが疑わないためにも、この遠征から米国に戻ったときには、六カ月ごとに一人の黒人を与え、その他に得られた利益も与えることを約束する。

私の計画ではまず、北西の路をたどってカドー族集落を通過し、さらに奥に行った場所に、敵の襲撃から身を守るために要塞を建てる。そこから内陸部に偵察に出て、鉱山やその他の天然資源を探すと同時に馬を捕まえる。偵察を終えて目標の数だけ馬を捕まえたら、イスラス・ネグラス (Islas Negras) に向けて出発し、続いてケンタッキーに向かう。

その後、8月か9月あたりには、フィラデルフィアに駐在するイギリス大使の協力を得て

(71) Wilson and Jackson, *Philip Nolan and Texas* (前注6参照), p. 40.

(72) Fernandez Tejeiro to Trudeau, Oachita, 7 de noviembre de 1800, Historia 413 part 1, pp. 259-260, 2Q189, AGN- UT.

(73) 11. Declaración de Tomas Jaus. 8ª Pregunta, Philip Nolan Papers 793, 2Q241 (University of Texas at Austin).

希望者を集め、その場所を征服しに行く予定だ。彼らが皆、馬で乗り込んでいけるように、私は今、馬を集めている。イギリス政府は私たちに味方すると間接的にはあるが聞いている。二年後には、私たち全員が裕福になって米国に帰るはずだ。

[……]スペイン軍が来たことで、あなたはまだ不信を抱いている。しかし、こうした事態は二度と起こらない。ナコグドチェスとサン・アントニオ・デ・ベハルの兵士たちは、今まで一度も私たちのところに来たことがないし、これからも絶対にそのようなことは起こらない⁽⁷⁴⁾。

この話を聞いたリチャーズは、ノーランが馬を集める以外の目的を持つと知って不安になり、やがて逃亡を決意した。そしてある日、ナッチェスまで戻り武器を調達する使いを頼まれたとき、その機会を利用して他の二人と逃げ出した。これに気付いたノーランはルシアノ・ガルシアを追手に出したが、リチャーズら三人を捕まえることはできなかった⁽⁷⁵⁾。リチャーズはナッチェスに到着するなり、スペイン人役人のもとに赴き、ノーランが打ち明けた彼の思惑を報告した。ノーランが秘密裏に何らかの計画を進めている、というリチャーズの発言に、スペイン人役人たちは思い当たるふしがあった。なぜなら、先に引用したジェス・クック宛ての手紙(96頁参照)をスペイン人役人は入手しており、その手紙には「私[ノーラン]がメステーニョを集めにきた、と全員が思うはずだ」という一節があったためである。この秘密裏の目的を具体的に証言したのは、リチャーズしかいない。もっとも、リチャーズの証言だけに依拠して、テキサスにあると目された鉱山等の征服がノーランの最終目的であった、と断言することはできないだろう。いずれにせよ、当時のスペイン人役人たちは、リチャーズの証言をきっかけに、ノーラン遠征隊に対する警戒心をさらに強め、逮捕に踏み切ることにした。ノーランを捕らえた者には、報酬として40頭の馬が与えられるとされた⁽⁷⁶⁾。

ノーラン遠征隊がワシタ駐屯軍と遭遇した頃、ビダルは、ナコグドチェスにいたノーランの協力者たちの動きも監視していた。ノーランの家畜交易のパートナーであるクックは、三度目の遠征後にナッチェスに来ていた。数カ月後に交易品を携えて一人でナコグドチェスに向かい、そこから馬を追いたてて再度ナッチェスに戻る予定であった。クックはナコグドチェスに到着した後、ホセ・デ・ロス・サントスを使いに出し、ナッチェスのノーランに手紙を届けさせた。このさいスペイン当局は、ロス・サントスをパスポート不携帯により逮捕し、クックにあてたノーランの手紙を発見した。ホセ・デ・ロス・サントスの逮捕により、ナコグドチェスに滞在するノーランの仲間の動きを知ったビダルは、即座にテキサス総督に書管を送り、ナッチェスに向かうクックを逮捕するように命じた。テキ

(74) Declaración que dió Mordica Richardo sin haber presentado juramento, el que ofrecio dar en caso necesario, Natchez, 13 de diciembre de 1801, Historia 413 part 1, p. 254, 2Q189, AGN-UT.

(75) Wilson and Jackson, *Philip Nolan and Texas* (前注6参照), p. 52.

(76) *Ibid.*, pp. 71-72.

サス総督は、この命令を受けるとすぐに追手を派遣し、まずは、クックに続いてノーランが集めた馬を追いたてていたロングビルとアントニオ・レアル、ヘトルディス・デ・ロス・サントスを捕らえた。その後、クックは別の地域で逮捕された⁽⁷⁷⁾。

スペイン軍が逮捕した上記の人びとは、何年にもわたりノーランの交易に関わっていたようだ。ジェス・クックはフィラデルフィア出身者であり、逮捕された当時40歳であった。スペイン領に入ったのは1790年代初期頃であり、当初はミシシッピ川流域でトウモロコシや焼酎などを売る行商人であった。その後ノーランから声をかけられ、1795年前後から彼の使用人として働くようになった。ノーランが三度目のテキサス遠征を行った1797年以降は、ヘトルディス・デ・ロス・サントスが管理するナコグドチェスの牧場に使用人として滞在するようになった。そこで彼は、ナッチェスで入手した交易品と交換するかたちで住民から馬を集めた。集めた馬は、定期的にナッチェスのノーランのところまで運び、そこで馬を売りさばいた。米国領での交易の全貌は、史料が残っていないため不明である。しかしクックは、一度テキサスから運んだ馬100頭ほどを、ウィルキンソン率いる軍隊に提供したと認めている⁽⁷⁸⁾。

ロングビルは、フランスのボルドー出身で、1801年当時テキサス在住歴15年であった。最初の10年間はナキトシュで仕入れた交易品をナコグドチェスで売り、生計を立てた。残りの五年は、ノーランのもとで働くようになり、ナコグドチェスとサン・アントニオ・デ・ベハルを行き来して、馬の移動や世話を担当した⁽⁷⁹⁾。

アントニオ・レアルはサン・アントニオ・デ・ベハル出身の牧場主であり、また、総督からの許可を得てトンカワ族と交易する小売商人でもあった。交易品はトンカワ族から集めた馬や毛皮と交換するかたちで、ルイジアナ周辺地域で入手しており、ノーランとは1790年にナコグドチェスに滞在していたときに知り合った。ノーランの交易を手伝うようになってからは、頻繁にナッチェスを訪れたらしく、あるとき115頭の馬をノーランのもとに届けたさいには、1,980ペソの売上金を得た。このうち600ペソは交易品で、残りの金額は銀貨で受け取った。レアルの交易活動は成功していたようで、米国領滞在中、彼は黒人奴隷を二人購入した。女性奴隷は400ペソ、男性奴隷は270ペソであった。これらの奴隷以外に、レアルは、ナコグドチェスの牧場の運営および交易のために合計八人のテハーノの使用人やハンターを雇っていた。彼らの報酬は月5-10ペソ程度であった⁽⁸⁰⁾。

レアルは先住民との交易でナコグドチェスを不在にすることが多かったため、牧場は彼の妻ヘトルディスが管理していた。彼女は、交易が成功した場合、4,000ペソと200頭の

(77) *Ibid.*, p. 44.

(78) 1ª Declaración de Santiago Cook; 2ª declaración de Santiago Cook, 23 de enero de 1801, BA.

(79) Declaración de Pedro Longueville, 23 de enero de 1801, BA.

(80) Declaración de Antonio Leal, 22 de abril de 1801, BA.

馬が与えられるとノーランから約束されていた。また彼女は、ノーランと不倫関係にあった⁽⁸¹⁾。1800年末、ノーランがスペイン人役人からの許可を得ずにテキサスに向かったとき、ヘトルディスたちはノーラン一団と入れ替わりになるかたちで馬をナッチェスに運んでいた。ノーランはこの頃、ナッチェスで米国人女性と結婚したばかりであり、ヘトルディスがナッチェスの彼のもとを訪ねることは不都合であった。モリデカイ・リチャーズの証言によると、これが一つの要因となり、ノーランは四度目のテキサス遠征をこの時期に決行し、ナッチェスを離れたという⁽⁸²⁾。

スペイン軍がクックやリアルを追っていた頃、ノーラン遠征隊はテキサスに入り、モンテ・グランデ(Monte Grande)と呼ばれる場所に要塞を建てて馬を追い始めた。何日か過ぎると、200人ほどのコマンチェ族が彼らのもとを訪ねた。ノーランと遠征隊員は、コマンチェ族とともに南下し、ニコロコ(Nicoroco)という族長が滞在する場所で一カ月ほど生活した。この間、ニコロコに友好的な先住民四、五人がノーラン一団を訪ねた。彼らはその後、再度馬を集めるため、コマンチェ族数人とともにモンテ・グランデに戻ったのだが、このときコマンチェ族は、米国人が所有する馬の中で最良の11頭を盗んで逃げた。これらの馬無しでは、野生の馬を追いたてることができないため、ノーランと五人の隊員はコマンチェ族を追跡し、彼らの野営地に到着すると、盗んだ馬を返すように族長に求めた。族長は、馬を盗んだ「ワン・アイ(One-Eye)」が夜には戻る、と返答したため、ノーラン一団は夜を待った。馬を連れて戻ったワン・アイを、ノーランたちは縛り付けて朝まで放置した。他のコマンチェ族は一切口出ししなかった。朝になると、ワン・アイの妻が馬を返しにきた。馬を無事取り戻した米国人は、彼らの「二倍の人数を打ち負かすことができる」と豪語し、野営地を後にした。この後、モンテ・グランデに他の先住民が現れ、ノーランたちを手伝いたいと申し出たが、ノーランは、コマンチェ族に裏切られた前例があるため、先住民を信用できないと考え、その申し出を断った⁽⁸³⁾。

米国人が馬を集めていた頃、テキサス総督フアン・バウティスタ・エルゲサバル(Juan Bautista Elguézabal)は、ノーランがテキサスに入ったらしい、との情報を得た。彼は、ナコグドチェス駐屯地に赴任する副総督ミゲル・ムスキス(Miguel Musquiz)に連絡を取った。そして、兵士を集めて先住民集落に入り、ノーラン一団を探し当て、逮捕するよう命じた。これに従いムスキスは、サン・アントニオ・デ・ベハルやリオ・グランデ駐屯地などの近隣地域から正規軍を集めると同時に、ナコグドチェスの民兵25人、義勇兵六人、カウダチョ族(Caudacho)一人を集め、計68人から成る部隊を編成し、1801年3月4日、先住民集落に向けて出発した。隊員の中には、テキサス総督から委託されて先住民と公式に交易を行っていたスペイン臣民商人ギエルモ・ウィリアム・バル(Guillermo William Barr)がいた。

(81) Declaración de Getrudis de los Santos, 22 de abril de 1801, BA.

(82) Declaración que dió Mordica Richardo..., 13 de diciembre de 1801 (前注74参照), p. 254.

(83) "Memoir of Colonel Ellis P. Bean" (前注57参照), p. 407.

バルはアイルランド出身者であるため、ノーラン一団および先住民とスペイン軍との通訳を担当した。カウダチョ族は、通訳兼道先案内人を務めた⁽⁸⁴⁾。

ムスキス部隊は、3月17日、トンカワ族の集落に到着したときに、有力な情報を得た。ムスキスが質問した二人のうち一人が、「長い髭を蓄えた」ノーラン遠征隊と思われる25人ほどの男たちが、さらに北東に進んだモンテ・グランデとブラソス川(Río de los Brazos de Dios)の間で、メステーニョを追うのを目撃したと証言した。ムスキスは、その場所への案内を請うたが、先住民は断った。彼によると、トンカワ族の族長はノーランに好意を抱いており、彼を殺そうとするスペイン人に味方できないとの理由であった。しかし、彼は同時に、役立つ助言を残した。彼によると、北西の方角から入れば、ノーランたちに気付かれずにその場所まで近づくことが可能とのことであった⁽⁸⁵⁾。

このトンカワ族の助言に従ってムスキス部隊は進み、モンテ・グランデと呼ばれる場所に到着すると、ノーラン遠征隊が作った屋根なしの要塞を発見した。そして21日の早朝、スペイン軍は要塞に乗り込んだ。ムスキスはバルをノーランのもとに送り、もし降服すれば誰も殺さないと伝えた。この間、ララとホセ・マルティネスの二人が脱走し、スペイン軍に加わった。また、デ・ラ・ガルサ、バルバン、トーマス・ハウス、マコイ、リチャーズの五人は、軍が乗り込んだときに野外で馬の世話をしていたため、直ちに逮捕された。バルの交渉にノーランは応じず、闘う姿勢をみせたため、スペイン軍と要塞に残った者の間で銃撃戦が始まり、午前10時頃、ノーランは銃殺された。他の遠征隊隊員はノーラン死後も抵抗を続けたが、最終的に降服した。なぜ最初から降服しなかったのか、とのムスキスの質問に対し、闘い続けた隊員たちはこう答えた。「スペイン人はおそろしく残虐であり、囚人を奴隷のごとく扱うので、死ぬまで闘えとノーランが言った」⁽⁸⁶⁾。

生き残った遠征隊隊員はナコグドチェスで裁判にかけられた。個々人の裁判が進む中、アシュリー、ムーア、ジョン・ハウス、黒人奴隷ロバートの四人は逃走した。ムスキスはすぐに追手を派遣したが、彼らを捕らえることはできなかった。その後、ブラックバーン、フェロ、トーマス・ハウスも逃亡を企てたが、これをムスキスに密告した者がいたため、逃亡計画は未遂に終わった。テキサス総督エルゲサバルは、ナコグドチェスでの監視の甘さからムスキスを叱責し、囚人を鎖につないでサン・アントニオ・デ・ベハルに連行するように命令した⁽⁸⁷⁾。

(84) Wilson and Jackson, *Philip Nolan and Texas* (前注6参照), pp. 71-72.

(85) Diario de las novedades ocurridas en la salida que Yo Don Miguel Fran.co Musquiz, Ten.te de la Comp.a de Monclova y Com.te del Puesto de Nacogdoches verificoel quatro de Marzo de mil ochocientos uno en solicitud de el Americano Felipe Nolan y Quadilla que le acompaña. Nacogdoches, 3 de abril de 1801, Miguel Musquiz, Philip Nolan Papers 795, 2Q241 (University of Texas at Austin).

(86) Philip Nolan Papers 793, 2Q241 (University of Texas at Austin)に残された米国人供述の大半で、ノーランのこの発言が指摘されている。

(87) Wilson and Jackson, *Philip Nolan and Texas* (前注6参照), pp. 74-76.

その後囚人は、サン・ルイス・ポトシ(San Luis Potosi)、サルティエジョ、チワワのスペイン軍兵舎を転々として、最終判決が下るまでの数年間を過ごした。エリス・ビーンの回顧録によると、囚人は日中のみ、決められた範囲内であれば外出し、自由に行動できたようだ。ビーンは、現地の住民たちと生活をともにし、サン・ルイス・ポトシでは靴職人、チワワでは帽子職人として働き、賃金を得た。特に帽子職人としては成功して、スペイン人二人を雇えるようになった。ビーンは、チワワの人びとが彼以外の職人から帽子を買わなくなるほど、良い腕前だったと回想している⁽⁸⁸⁾。米国人囚人たちに対する最終判決は1807年に下され、その後彼らは米国に送還されたのだが、ビーンはその途中、何度か逃亡を繰り返し、そのたびに投獄された。折しもメキシコ独立運動が勃発し、ビーンはホセ・マリア・モレーロス(José María Morelos)率いる反乱軍に加わるようになった。そして、反乱軍を代表する特使として米国ルイジアナに赴いたときに、15年ぶりの米国帰還を果たした。ヌエバ・エスパーニャ副王領での生活が長かったビーンは、英語を忘れる寸前だったようだ⁽⁸⁹⁾。ビーンは結果的に、ノーランよりもヌエバ・エスパーニャの文化や慣習を身に付けた米国人となった。

むすびにかえて

以上、ノーランが地域および民族横断的に交易活動を行った様子から、18世紀のテキサスルイジアナ^{ボーダーランズ}境界地域においては、境界線の両側の地域に住む多様な民族が、境界線をあまり意識せずに互いに交流し、協力、妥協、反目を繰り返す中で、それぞれの目標を達成しようとしていたことが浮き彫りになった。そこでは、「文明」の担い手とされるスペイン人や米国人などの支配者層が、被支配者層である地元の住民や先住民を一方的に支配していたのではない。両者は、相互に交流し、影響を与え合う中で生活していたのであり、被支配者と目される側(例えば先住民)の要求に、支配者と目される側が屈することもしばしばみられた。また、当初、境界地域のスペイン人役人たちは、米国領との境界線を明確に意識することはなかった。しかし、スペイン-米国間に軋轢が生じると同時に、外国人という他者の流入が急増した1790年代後半以降、彼らは米国との境界線を強く意識するようになった。ノーランの越境的な家畜交易の展開過程は、境界地域のスペイン人役人たちが自分と他者、自国領と他国領との境界線に次第に敏感になる過程でもあったのである。

ノーランの活動の顛末から露呈されるのは、境界地域におけるスペインの防衛体制の長年にわたる不徹底性と、スペイン本国の弱体化である。この後、当該地域では境界線をめぐるスペイン-米国間の対立が激化し、現地のスペイン人役人たちは、何らかの対策を講じなければ当該地域が米国領になってしまう、と警戒を強めた。しかし、ヌエバ・エス

(88) "Memoir of Colonel Ellis P. Bean" (前注57参照), p. 409.

(89) *Ibid.*, p. 403.

ーニャ中央政府の役人にとって、総人口三千人ほどの辺境地の問題は、優先順位の高いものではなかった。入植者の誘致と防衛強化というテキサスの二大課題は、最後まで十分に取組みられず、最終的にテキサスは米国領になった。今日メキシコ人の中では、米国がテキサスを強引に奪った、とする歴史認識がみられる。しかし、スペイン側にもテキサスを喪失する要因があったことは否めないだろう。

最後に、巨視的な視点から、18世紀末と今日における、境界地域の社会状況の共通点を考えたい。当該地域では、ヨーロッパ人が入植し始めた時から既に、境界線の両側を人と物が行き来していた。このように歴史的に築きあげられた境界線の両側の地域の相互依存的な関係は、二世紀以上の時間を経て、物質的な壁が作られた今日においても、大きく変わることはないと言えるのではないだろうか。18世紀当時、当該地域では、タバコや、本稿で扱ったメステーニョが密輸されていたが、現在ではこれに代わって麻薬が密輸品となっている。米国人は、安価なサービスや物品を求めてメキシコ側に越境しており、一方で、メキシコ人は、現地では得られない自己実現の場を求めて米国に越境している。1821年以降、テキサスには大量の米国人入植者が押し寄せ、最終的には1845年に、メキシコ領から米国領になった。それから一世紀半以上が経過した今日、この地域には大量のメキシコ人移民が流れ込んでいる。その結果、当該地域には、米国であるにもかかわらずメキシコにいるような印象を与える社会空間が出現している。このようなハイブリッドな社会空間は、境界線の両側の地域が相互関係を築く中で、歴史的に形成されてきたとみなすことも可能であろう。確かに二世紀以上の時代を経るなかで、出入国管理の技術は格段に洗練されたし、また、当該地域を領有した国も、スペイン、フランス、メキシコ、米国と変遷した。当該地域において、大きな歴史的変化が繰り返し起こったことは確かである。しかし、境界地域の根本的な性格、つまり境界線のあちら側の地域とこちら側の地域の密接な関係性は、18世紀末も今日も基本的に変わらないであろう。

今日、米国政府はメキシコから米国に陸路をつたって非合法に入国する者と、既に非合法に米国で暮らしている中南米出身者に対する監視を強化している。しかし、これからも、メキシコー米国間の非合法的な人と物の流れは、続くように思われる。

